

地名から覗く「故郷」の暮らし：おじゃまします： 訪問先・服部英雄さん(日本中世史)

服部, 英雄
九州大学：名誉教授

嶋田, 絵里
「西日本文化」編集室

<https://hdl.handle.net/2324/1547321>

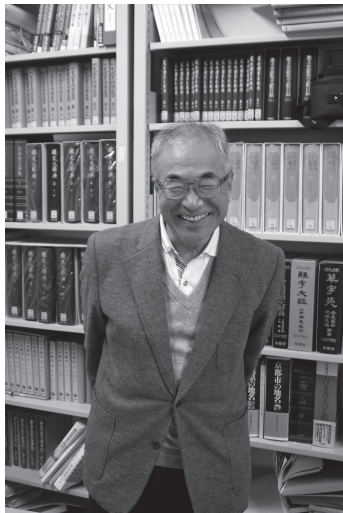
出版情報：西日本文化. 477, pp.20-23, 2016-01. 西日本文化協会
バージョン：
権利関係：



おじゃまします

訪問先・服部英雄さん（日本中世史）

地名から覗く「故郷」の暮らし



はっとり・ひでお
・1949年、名古屋市生まれ。東京大学大学院人文科学研究科国史学修士課程修了。文化庁文化財保護部を経て1994年から九州大学大学院比較社会文化研究院に在任。著作に『景観にさぐる中世—変貌する村の姿と荘園史研究』（新人物往来社、1995年、角川源義賞）、『河原ノ者・非人・秀吉』（山川出版社、2012年、毎日出版文化賞）。他に『地名の歴史学』（角川叢書、2000年）、『地名のたのしみ 歩き、み、ふれる歴史学』（角川ソフィア文庫、2003年）、『蒙古襲来』（山川出版社、2014年）など多数。

家族のありようが大きく変わっているが、盆・正月の帰省ラッシュは今も受け継がれている。ふつうには親元など家族にゆかりの地に帰る風習のことだが、その底流の「故郷回帰」の意識を歴史的にたどっていくと、家族の系譜にかかわる土地への愛着も潜んでいるかもしれない。ただ、多くの古い地名はすでに失われつつある。その歴史的な地名を長年にわたって研究している服部英雄さん（九州大学名誉教授・中世史、著書に『地名の歴史学』に、地名にまつわる話をうかがった。（インタビュアー 編集室・嶋田絵里）

*** **

―戦後、繰り返し返されてきた開発や土地と地名の行政統合によって、昔の地名が消えていますね。

たしかにそうですが、今もまだ、古代の地名があちこちに残っています。福岡都市圏で

も薬院、警固とか、近郊では俗明院、周船寺とかありますね。古代の「大宰府」関連の地名で、「薬院」は薬を出す施薬院、医療福祉施設です。「警固」は今で言う警察・軍隊の駐屯地。「俗明院」の「ぞくみょういん」も佐賀県に「続命院」と書かれているものがある、当時の医療施設です。「周船寺」も「主船司」と表記されたものに相当し、「船を司る役所」があったところ。そういう地名が残っています。条里制の坪名（一の坪、二の坪、三の坪など）もよく残っていました。古代の地名だけど、大坪、中坪、坪井など現代の姓も関係あるかな。

―地名が姓名ともつながっているのですね。

ラグビーで一躍、有名になった「五郎丸」も、中世の地名から発しています。もとは庄園制の地名で、太郎丸、次郎丸、三郎丸とかもありますし、五郎丸は久留米市や那珂川町などの字名（あざな）にあります。福岡市西区にあった怡土庄には、六郎丸名（みよう）という名（みよう）があったことが、庄園史料からわかります。その六郎丸という地名は、明治時代に耕地整理されるまでは元岡にあつて、地籍図でその位置がわかります。庄園の庄官の役名から、下司、公文、地頭、田所など。姓名になっているものもあります。徳永・稲永・富永・福吉とか縁起のいい名前中は中世の名（みよう）

からで、春吉とか秋吉とか、季節の名を付けた地名もあります。

―読み方が難しい、難読地名もありますね。

潤地頭給遺跡が糸島市にありますが、これは「地頭給」が元来で、地頭に与えられた免田という意味だと思います。領主の直営田に由来する、「用作」と書いて「ようじやく」とか「ゆうじやく」と呼ぶ地名もあります。周船寺に用作橋があります。その村で一番いい地味の豊かな米がよく獲れる乾田を持っているのは領主ですが、そこが用作になります。ところがこの乾田が洪水などの災害で用水施設が壊れたりして、水が供給されず作物が実らなくなることがある。日照りにも弱い。そういうときのために、干ばつになっても作物が育つ湿田も同時に所有していた。そこも用作。そういうことが「用作」地名の配置からわかります。「いりよう」とか「いりゆう」という地名もあって、井領とか井龍とか、いろんな字を宛てているけれど、本来は井料。田への用水管理に当てる田です。

―農業に関連する地名が多いのですか。北九州市小倉北区に旦過市場があります。これは禪宗に由来していて「旦過」という地名は九州各地にあります。もともと中国に旦過という宿泊制度があり、中国で学んだ禪宗のお坊さんが日本に採り入れたみたい

です。今も地名が残っているところだと、志賀島（福岡市東区）の旦過町ですね。この志賀島の「旦過」は「たんば」と呼び、文書にもそう書いてあります。今津（福岡市西区）の勝福寺のすぐ近くの「旦過」も地元の人には「たんば」と言います。筑前では「旦過」を「たんば」と発音したようです。志賀島は博多湾への入口、今津は博多の新しい港、春日市の白水では肥前街道が通っているところ。いずれも交通の要所に「旦過」がありました。本来は、禪宗の行脚僧の雲水が宿泊するところだったけど、だんだん無料宿泊所みたいになっけいきました。

―地名から昔の交通事情もわかるのですね。

古い地名をたどっていくと、その土地がもつ歴史が見えてきます。たとえば「免」という字が福岡市早良区などにありますが、これは、そこからの年貢が特定の用途に当てられた田んぼを示します。「鐘撞免」という地名だったら、それはお寺の鐘撞堂の維持のために使う。「経免」だったら大般若経の免田で、お経を読む儀式や法要に使う費用を出すとか。九州大学がある元岡には、明治時代まで「筥崎免」という地名があったことが分かっているんですけど、これは筥崎宮のお祭りなんかのために出す費用を作るための田んぼだったと思いますね。

―海の中にも地名がついているところがあったそうですね。

海辺にはウニを捕ったりアワビを捕ったりするときの目印にするために、磯にも岩にもたくさん地名がついているし、海の中にも、定置網をかける場所には地名がつけます。今津湾の真ん中にも、「くもぜ（雲瀬）」という浅瀬があつて、よい漁場でした。昔は山の上から見張っていて、魚群がくると波立つから分かるし、海鳥も集まる。合図をして漁船がそこに向かう。春の大潮の引き潮では、海の中のその岩礁に、人が立てるそうです。今津の岸から能古島の間雲瀬とじょうこばん（常空庵瀬）の二ヶ所、そういう瀬があり、海図や近世の史料などの文献に出てきます。

―読み解きがむずかしい地名もあるでしょうね。

文字面で地名を見ただけじゃ分からないことも多いです。関東地方に多い「ミソザク」という地名ですが、その地名が何を意味しているかわからなかったんです。あるとき、群馬県邑楽郡にある御正作（みしょうさく）遺跡を訪ねたとき、地元の人に「ミシヨウサクはどっちですか？」と聞いたら、「ミソザクは、あっち」と言われた。それで「御正作」は「ミソザク」と呼ばれていることを知りました。「シヨウ」や「シヨ」と発音するものを「ソウ」「ソ」と書いたり言ったりしてい

るわけです。たとえば、「文書（もんじょ）」を「もんぞ」とひらがなで書くし、「御教書（みきょうじょ）」を「みけうそ」と書いたり、「所領（しよりょう）」を「そりよう」と書いたり。だから、「ああそうなのか。シヨはソ、シヨウはソウなんだな」で「ミシヨウサク」↓「ミソウサク」↓「ミソザク」とわかったこともあります。佐賀県に祖子分（そしぶん）という地名がありますが、並んで惣領分があるように、やはり庶子分のことだとわかります。

―時代や土地の違いによって発音が変化することもあるのですね。

方言を知ること大切ですし、発音で「オ」と「ウ」は変化しやすいと言えます。「ようじゃく」が「ゆうじゃく」になったり、「いりよう」が「いりゆう」になったりする。「万葉集」に山上憶良の有名な「子らを思う歌」で「白銀も黄金も玉もなにせむに まされる宝子にしかめやも」で「黄金（こがね）」を「くがね」と読みますね。地名調査の際にも考えておいた方がよい。

―古い地名の研究のきっかけは？

私は、出身は名古屋ですけど、学生時代、卒業論文で出会った古文書が、たまたま九州のもので、佐賀県武雄市の小字や地名を調べながら書きました。調査のため武雄に来て、市役所で小字の地図を手に入れ、現地に行って「どんな地名がありましたか」と聞いてま

美するために作った本であって、歴史書としてはでたらめだ、と書いてありました。それがヒントになって、一四世紀の日本を揺るがした蒙古襲来の研究を始めました。「八幡愚童訓」を読み直して、文永の役で蒙古軍が一夜にして博多湾から姿を消して引き返したというのはおかしい、作り話ということを書きました。そのあと、弘安の役のことも入れて『蒙古襲来』（山川出版社）を二〇一四年に出しました。

元寇に関する重要な絵巻物『蒙古襲来絵詞』に、文永の役で竹崎季長が蒙古軍の三人にコテンパンにやられている場面があります。貴重な描写です。あの三人は原画にはなかったもので、後世の加筆だ、ということを中村学園大学の佐藤鉄太郎さんが発表しました。でもよく見たら絵詞のなかに加筆はいっぱいあるんです。佐藤説は流布したけれど、おかしい。もし三人を除いてしまつたら、季長が絶体絶命の窮地に追いやられた絵の場面が成立しません。また竹崎季長の「絵詞」には奥書が二個あるんですけど、だいたい奥書が二個あるのがおかしいし、それから調べていくと、「絵詞」の中に同じ文章を書いたところが二箇所あります。重複だから、どっちかは後世のものです。全体の筆跡からいえば、一つが当時のもので、一つは後世のもの、その後世のものの筆跡と奥書の筆跡がいっしょ

わかりますと、どんな地名が出てきて、それが全く文字化されていないものでした。それを「しこな」と言っていました。しかもその地名「しこな」の方が中世の文書に書いてある地名に合致する。そういうのを調べなきゃ、と思いました。その後、文化庁に入って、個人的には庄園の調査も少しずつ継続していましたが、一九九四年に九州大学に助教として赴任しました。佐賀県の地名の調査をしようと思った大きなきっかけは、圃場整備です。その前後に圃場整備が行われて、古いクリークや田んぼがなくなっていました。橋にもいろんな古い地名がついていたけれど、その橋もなくなっちゃって、二〇世紀の終わりというのはすごい変化があった時期です。農業の機械化を重視していたから、大きなトラクターが入らないところは、造りかえてしまった。だから古い小さい田んぼに付いていた名前が消えていきました。忘れ去られる前に記録を残したかった。着任した一九九四年から、学生といっしょに、佐賀県の小字やしこなを、調べ始めた。ほんとうはその小さい田んぼやクリーク（ほい）、そこに付いている地名を残せばよかったかも知れないが、だれもそんなことは考えない。せめて記録だけでもと、定年まぎわの二〇一三年まで、延べ四千人の学生といっしょに約二千の村を訪ね、四万件の字名を採集しました。できあ

でした。だから、奥書は後世のものだから、これにもとづいて本文を解釈しちゃいけない、と考えて、それをまとめて論文にしていたこともあります。全体を本にしました。まとめるために調べ直したら、いろんなことがどここ、わかってきて、あまりにも直すので、しまいに編集者が怒って「もういいかげんにしてください」と言ったから、最後にわかったことはあの本に入っていました。それから、一回発表すると批判も受けるので、それへの回答を織り込んで、もういっぺん「蒙古襲来」に関するつぎの本を出したいと思っています。

*** **

海に託した希望

―『原城発掘』の着眼

『原城発掘―西海の王土から殉教の舞台へ』、つづいて『河原ノ者・非人・秀吉』、『蒙古襲来』と本を出しました。他にも数冊、書いていますが、マスコミ関係から取材が多いのは、豊臣秀頼とか、蒙古襲来とか、あとは島原の乱に関すること。『原城発掘―西海の王土から殉教の舞台へ』は、島原の乱（一六三七～三八八）での原城の戦いがテーマです。原城に籠城した戦士たちは、海に囲

がった地図（二千人が七百の村で聞き取った二万の地名、しこな）『四千人が二千の村で聞き取った四万の地名、しこな』ともに花書院）を見て、こんな地名もあったなど、お年寄りには懐かしがるけれど、まもなく、全く忘れられるでしょうね。

・・・余談ですが・・・

*服部英雄さんには、九州ゆかりの多くの著作・論文がある。そのうちから近刊の『蒙古襲来』（山川出版社）と以前に刊行された『原城発掘―西海の王土から殉教の舞台へ』（新人物往来社）についてうかがった。

先学の指摘がヒント

―『蒙古襲来』執筆へ

大正時代の終わりころ、九州大学医学部教授に在職しながら考古学を研究していた中山平次郎さんたちが今津海岸の元寇防塁を発掘した。そのときの記録集が九大・六本松キャンパスの図書館にありました。それを読むと、「元寇」についての叙述で古典になっている「八幡愚童訓」（鎌倉末期成立。八幡神の霊験を述べた神道書）は、八幡信仰を賛

まれた城に追い込まれ、絶望して死を待っていたと言われています。私はそう考えていなくて、海があるからいくらでも自由に行き来できる。自分たちの仲間である日本列島のキリシタンに呼びかけて続々と蜂起させる。最後はポルトガルから援軍が来て、キリスト王国をつくる、そのつもりだったと書きました。実際、籠城した人の気持ちになつて考えると、四万人の人がみんな死ぬ気でいたというのは考えられないですね。なにか希望があったんじゃないかなと。それに原城には海に向かって門があるんですよ。大手門である日野江（樋ノ上）門をはじめ、田尻門とか、蓮池門（池尻門）とかみんな海に向かって開口していました。原城に限らず、海城という城はそうなっている。高松城にも赤穂城にも、三原城にも海への出口があるし、福岡城だってある意味、お堀が海につながっていますよね。江戸城もそうかな。原城というのは、海に意味がある城です。それを考えたなら、海に包囲されていて、籠城した男女が絶望的な思いをしていたというのはおかしいと思います。そのことを書いています。

歴史は、ちよつと立場を変えろといろんな見方ができます。それを史料で裏づける。それがないと評価されないから、その作業が必要です。